

# 世界文化遺産登録に向けて

## 佐渡の金銀山史を彩る人々

### ○水替とは？

これまでに掘られた坑道の総延長400キロメートルともいわれる相川金銀山。こうした鉱山では、鉱脈を求めて地中深く坑道が掘られています。坑道が深く掘られるにしたがって、鉱山では地下水や地面にしみこんだ雨水による湧水への対策が最大の課題となります。湧水を放置しておくとも坑道内が水没し、金銀の採掘ができなくなる



▲水上輪と釣瓶を使った排水作業の様子

ため、常に排水をすることは坑内の重要な仕事のひとつでした。時には南沢疎水道に代表される水貫と呼ばれる排水坑道や樋引などによる大掛かりな坑道や設備による排水作業が行われたほか、人力による作業が併用されていました。排水のための技術のなかで、もっとも原始的な方法が手繰り水替という釣瓶や桶を使った汲み上げでした。細工物（器具）を使った排水では、慶長年間から使われた「寸法樋」と呼ばれるスポイトの原理を応用した木製のピストンポンプ、承応2年（1653）に導入されたといわれる「水上輪」と呼ばれたアルキメデス・ポンプの原理を応用した内部にらせん状の羽が付けられた細長い筒がありました。天明2年（1782）には天秤式の手押しポンプであるオランダ水突道具「フランカスホイ」が使用されました。坑内の排水作業の様子は、鉱山絵巻などの坑内の様子を描いた絵図や絵巻にも描かれており、その様子をうかがうことができます。作業には水替を専門に行う町人や各集落に割り当てられて手伝いに出た農家の人々がいました。一昼夜交替制の重労働であったため作業員の確保が難しく、作業員の確保・賃金の抑制のために、のちに無宿人と呼



▲佐渡金山第二駐車場にある水替小屋跡

ばれた人々も水替作業に従事させられたことがありました。

### ○江戸水替の人々

安永7年（1778）から佐渡奉行石谷清昌の発案で、江戸をはじめとする大都市の治安維持のため無宿人と呼ばれる戸籍を持たない人々が、江戸・大坂・長崎で拘禁されて相川金銀山に送り込まれました。無宿人たちは唐丸籠に入れられて佐渡に「島送り」とされ、相川金銀山敷地内の間ノ山に建てられた水替小屋に収容され、一昼夜交替で入坑して水替え作業に従事しました。このような人々は特に江戸の無宿人が多かったため江戸水替と総称されていました。数年間働くと、「平人」として出身地へ帰国するか、出身地に身元引受人がいな場合には佐渡に居住することが許されました。

### ○江戸無宿の墓

相川次助町の覚性寺跡にある江戸水替無宿の3基の供養塔で、江戸無宿の墓と呼ばれています。中央かまぼこ形の石塔を見ると、正面に「南無妙法蓮華経」の文字、左右に14名ずつ28名の戒名・名前・出身地・没年が刻まれています。嘉永6年（1853）7月17日、青盤間歩で起きた坑内火災により亡くなった無宿人を供養するもので、彼らの名前の他に救出作業に従事し、奉行からの褒美を供養に充てた旧江戸火消し差配人與吉の名も刻まれています。

現在でも毎年4月の第3日曜日に無宿人の供養祭が行われており献花が絶えません。



▲相川次助町の江戸無宿の墓

◆教育委員会 世界遺産・文化振興課

☎ 27-4170